道路維持修繕費の動向を見る（承前）

K・A生

◇

十四年度當初豫算に於て、十三年度の當初豫算に比し增額計上せられたものに、

宮城縣　五百八十五圓
新潟縣　二萬圓
福岡縣　四萬七千二十七圓
鹿兒島縣　四千七百七圓

の四縣がある。此の內福岡縣は、右の金額の外尙五割乃至八割に相當する割合で地元から材料の寄附を受入れて追加豫算を爲し、旣に八月末日で其の追加額は三萬圓に達して居る盛大さである。

◇

當初豫算で、十三年度と同額を編成したもの卽ち減額せざりしものに、

靑森縣　福島縣　千葉縣　石川縣　長野縣　靜岡縣
愛知縣　大阪府　兵庫縣　岡山縣　山口縣　大分縣

の十二府縣がある。

、當初豫算に於て減額せず、實行豫算に於ても減額したものはない。

◇

當初豫算に於て減額したものは、

群馬縣　五分減

福井縣　一割減

山梨縣　一分九厘減

和歌山縣　道路　三分減
　　橋梁　二分減

長崎縣　六分六厘減

熊本縣　五分減

の六縣である。此の内和歌山縣の如きは、單價を減額して居る。世間の物價が鰻上りに昇つて居る時に、和歌山縣丈けが物價が降つて居るのかと一寸皮肉つて見たい氣がしてならぬ。

他の五縣は恐らく問題化した、「……豫算額を前年度當初豫算額に比し、特別の事情なき限り尠くとも一割以上の節減を期すこと云々」と云ふ地方豫算に對する一般方針を無條件に承服して其の結末を土木費に喰ひ込んだ結果であらう。此の方針を事の順序や、物の性質の輕重を判斷せずして、徒らに文面を鵜呑みにした地方財務當局の低調さもさることながら、又之を拱手傍觀した地方路政當局の手腕は何と云ふても見上げる譯には行かぬ。

◇

岩手縣では當初豫算に於て五分の六千三百圓を減じたが、其の結果覿面な路面の現實に驚愕して去る七月に二千圓を追加した。

秋田縣では、當初豫算で約一割に當る一萬八千圓を減じたが、道路鋪裝費に五萬七千餘圓を追加して、砂利道の修繕區間を短かくすることに努め、また省營自動車の負擔金や其の他特殊の寄附等を受入れて一般修繕費に追加して居る。尚仄聞する所に依ると、更に三萬圓程度の豫算を追加することに縣首腦部の議が定まり、近く其の實現の見込である。

茨城縣では當初豫算に於て六萬餘圓を減じた。これは其の率に於ても額に於ても、三府四十二縣（北海道及沖繩縣を除きたる府縣）中の減額の筆頭であつて、誠に遺憾の極みである。之が對策としては、委託工事で砂利を寄附せしめたり、道路占用に伴ふ路面復舊を縣で引受けて經濟的に

仕上げたりして減額の補給に努めて居る。其のナミ〳〵ならぬ苦心の程は御察しする。しかし委託工事や路面復舊の仕事は、當初豫算の編成とは何の關係もないことである。當初豫算が多くても或は委託工事があつたかも知れないし、また當初豫算が減額されて居つても路面復舊の仕事がなかつたかも知れない。當初豫算が減額せられた處へ、偶々委託工事や路面復舊の仕事が舞込んで來たから、渡りに舟と萬悅したまでのことで、減額の對策としては少しドウかと思はれる。しかし別に單獨縣費の災害で路面の不良を全面的に修繕する意味合に於て、四萬圓を議決して居るのは、其の方針や取扱方の良否は別として、兎も角之等三者に依つて事實上減額を補塡して居る譯である。が、十五年度では眞に充分な對策を考究して頂きたいと思ふ。

◇

以上で十四年度の道路維持修繕費の全貌を極めたのであるが、記述が二回に亘つた關係上重複はするが讀者の批判對照の便宜の爲茲に再錄して見る。

十四年度當初豫算に於て、十三年度の當初豫算額よりも增額したものは、

宮城縣　栃木縣　埼玉縣　神奈川縣　新潟縣　鳥取縣
高知縣　福岡縣　鹿兒島縣

の九縣である。

當初豫算は前年度通りであるが、年度開始後追加したものに山形縣がある。

當初豫算で、前年度と同額を計上したもの卽ち、減額せざりしは、

青森縣　福島縣　千葉縣　東京府　富山縣　石川縣
長野縣　靜岡縣　岐阜縣　愛知縣　三重縣　京都府
大阪府　兵庫縣　奈良縣　岡山縣　廣島縣　山口縣
愛媛縣　佐賀縣　大分縣　宮崎縣

の二十二府縣である。

當初豫算に於て減額せず、實行豫算に於て減額したものは、

德島縣　香川縣である。此の兩縣は夫々別に其の對策を

實行したことは前號所載の通りである。

當初豫算に於て減額したものは、

岩手縣　秋田縣　茨城縣　滋賀縣

の四縣であるが、之れ亦種々の對策が實行されて居ることは前號及右記述の通りである。

當初豫算に於て減額し、其の儘となつて居るものに、

群馬縣　福井縣　山梨縣　和歌山縣　島根縣　長崎縣

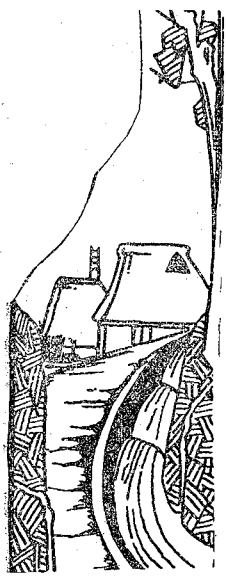
熊本縣

の七縣がある。

◇

之で見ると、前年度と同額又は夫れ以上を議決したものは、三十二府縣で、六縣は一應減額はしたが、別途に對策を樹てゝ居る。殘りの七縣は全然無爲無對策と云ふ具合で、誠に寒心に堪えない。

一體有體に云へば、總ての物價は著しく騰貴し居るのであつて、道路の維持修繕に付ても、材料や人夫賃が昂騰して居るのである。從つて此の點から丈けでも、道路の狀態を事變前の狀態通りに維持して行くが爲には、金額に於て前年度と同額でさへ相當の苦心と努力とを要するのである。しかも道路交通の實狀と其の近き將來に對する見透しに付ては、前號冒頭に述べし如く極めて重大時に直面して居るのである。

然るに斯る急迫せる實情を稽へずして、之を慢然と「當初豫算に比し一割減」の辻褄の犧牲に供して恬然たるは、餘りにも智惠のない話で、また時局認識の上から、其の不甲斐なさに慨嘆せざるを得ぬ。

ドウカ非常時局を充分自覺すると共に、實情に卽して行政せられん事を希望して已まない次第である。